

戦時下の三中生の記

三中37回 天 野 光 三

目 次

- (1) 昭和二十年までの「中等学校」
- (2) 太平洋戦争の戦時下四年間の三中生
- (3) 戦時色・いろいろ
 - 大詔奉戴日 教 練 査 閲 行 軍
 - 軍人組 寒稽古 成績貼り出し 団体行動
 - 勤労働員 半田への「通年動員」
- (4) 半田への通年動員の思い出
 - 山方工場 本工場と新機見送り 残 業 通勤
 - 帰省 蓋にいなご 焼き芋 アゲインと雑炊
 - 「食べ物の恨み」 食材確保と給食
- (5) 生死の分かれ目、何が幸いに？
- (6) 日本の「豊かさ」と平和と自由」の有難さ

〔一〕昭和二十年までの「中等学校」

京都市内の小学校は一・二年生までは男女混合組だが、三年以上は男組・女組にきつちりと分けられた（例外的に三年生まで混合組とした小学校もあった）。

漢書でいう「男女七歳にして席を同じうせず」より一歳は遅れるが、誰もがそれを当然と思っていた。同様に、今ではとても信じられないかも知れないが、男女共学の「中等学校」は日本中に一校もなかったのである。

当時「尋常小学校」卒業後に進学する学校の総称を「中等学校」といい、男子には「中学校」「商業学校」と「工業学校」があった。女子はすべて「高等女学校」であり、入学の地域制はなかった。小学校卒業時に六年担任教諭が保護者の相談を受け、能力に応じた学校に振り分けて進学を奨めたので、競争率はそんなに高くなかったが、今と違って入学試験があった。

男子の「中学校」は、京都市内には公立では一中・二中・三中と桃山中学があった。私立中学には同志社・立命館・平安のほかは数校程度しかなかった。中学校のほかに公立の一商・二商、一工・二工と、私立の京都商業などがあった。京都市内に男子の「中等学校」はそれだけしかなかったから、「高等小学校」というわずか例外を考えても小学校卒業生の半分以上は

商店の店員や町工場の職工になったと思う。

一中・二中・三中の成績上位者は、卒業後高等学校（旧制）への進学を目指した。全国には約三十校の高等学校（国立）があった。そのうち京都には第三高等学校があり、その卒業生はほとんどが京都帝国大学に進学できるという名門高校であった。

三中からは毎年十人～二十人、例えば三十六期は二十二名、われわれ三十七期は二十名が当時の最難関であった三高に合格し、三中は京都では一中に次ぐ名門中学であった。

公立の「高等女学校」は府一・府二・嵯峨野の他に市立の二校と、私立では同志社・京都・平安などの数校しかなかったから、進学率は男子の半分にも達しなかったと思われる。

また、高等女学校は京都都心部に集められ、互いの接触を避けるかのように男子校は距離を隔てた洛北・洛南・洛西など郊外部に配置されていた。

（2）太平洋戦争の戦時下四年間の三中生

京都府立京都第三中学校（略して京三中）三十七期生であるわれわれは昭和十六年四月に三中に入學した。われわれが一年生であった十二月八日の早朝、ラジオが「帝国陸海軍は西太平洋において米英と戦闘状態に入れり」というあの有名なハワイ真珠湾攻撃の大本営発表を伝えた。

その日はひととき冷たい朝だった。戦争がいつ起っても不思議でないという、子供心にも日米関係の緊張の予感があったから、「今まで隠忍自重を重ねてきたがついに日本が立つときが来た」と授業のはじめに教諭の話があり、その時のピンと緊張した雰囲気は今も覚えている。

このように太平洋戦争の八ヶ月前に入学し、五年制のはずなのに四年で繰り上げ卒業になったため、終戦の四ヶ月前に卒業させられたクラスであり、われわれは「太平洋戦争中であつた三年八ヶ月」をそのまま京三中生としてフルに生きた学年であつた。

一年生であつた昭和十七年三月までは、ハワイ真珠湾やマレー沖・パレンバン・仏領インドシナ・シンガポールなどで連戦連勝のお祝い気分であつた。

しかし二年生になると出征兵士の見送りは増え、南方に広がった戦線は膠着状態になった。戦闘帽が制帽になり、ゲートル（巻脚絆）着用が強制され、教練や行軍の比重が増えるなど、中学生生活のあらゆる面に戦時体制が浸透していった。

昭和十八年二月のガダルカナル撤退、四月連合艦隊山本司令長官の戦死、五月のアッツ島玉砕、十二月のマキン・タラワ島玉砕と、敗報が相次ぎ、「一機でも多くの飛行機を前線へ」、「欲しがりません、勝つまでは」「一億総突撃」などの戦意高揚

の標語。応召、徴用、学童疎開と、すべてを戦力に振り向けるための国民総動員体制が進められていった。町内会や隣組総出で防空演習、防空壕掘りが始まった。われわれ三中生も麦刈り、稲刈りや火薬庫への勤労働員など戦時体制一色になっていく。そしてこれらの行事に時間をとられて授業時間が少なくなり、授業の進度が飛ぶように早くなり、また、午前七時から早朝や夕方六時・七時までの授業や、随時月曜とか火曜の時間割による日曜日の授業が当たり前になった。

一方では二年生・三年生から陸軍幼年学校や海軍予科練習生の募集がはじまり、四年生では陸海軍の士官を育てる陸軍士官学校（陸士）・海軍兵学校（海兵）の合格者数が京都の中学校間の競争になった。

昭和十九年一月には、中等学校・高専・大学の修業年限をそれぞれ一年ずつ短縮することと、約三分の一の修学時間を勤労働員に充てる事が決定された。そしてその僅か二カ月後の三月には、一切の授業を休止して中等学校以上の通年勤労働員の実施が決定された。

（3）戦時色・いろいろ

このように学園は戦時体制一色になっていった。その当時のそれぞれの事項について思い出すままに次に要約する。

① 大詔奉戴日 太平洋戦争開戦日の十二月八日にちなみ、毎

月八日を「大詔奉戴日」として全校生徒一二五〇人が午前七時に、平野神社（月により北野神社）の社頭に集合して必勝を祈願し、前線の兵士の労苦を偲びつつ行軍・教練などで鍛える日になっていた。

② 教 練 日本全国の「中等学校」には現役バリバリの配属将校が中心となり、「教練」という週一・二回の授業が組まれていた。わが三中では気力溢れるその中尉殿に「狂犬」という綽名を差し上げていたが、その怖かったこと。

学校に銃器庫があり、四・五年生全員に行き渡る訓練用の小銃（三八式歩兵銃）、三年生用の村田銃（日露戦争時代の古い銃）と、少数の軽機関銃・擲弾筒などが保管されていた。銃剣術・伏射・小隊密集戦闘・分列行進などが教練の内容であった。

昭和十九年六月には、四年生の五つの組を擲弾筒・軽機関銃・小銃に分けて、それぞれ専門の訓練が始まった。当時は全く気付かなかったが米軍の本土上陸時の実戦に備えるためではなかったかと思われる。

③ 査 閲 師団司令部派遣の中佐か少佐の査閲官が年に一回、全校の「教練の練度」を監査に来る、当時大切な行事であった。当日は全校生徒が午前七時に学校を出て、三年生は二日の砂袋を背囊に、嵯峨まで往復十二軒を行軍して十時帰着。教練の成果の試技や閲団分列行進などをし、これらについて査閲

官殿の講評があった。これに少しでも高い評価を貰うために配属将校は事前の約一ヶ月ほど、生徒の猛訓練に懸命だった。

④ 行 軍 三年生になると小銃・背囊で武装し、校舎を出て福王子・広沢池・嵐山を経て、東公園で昼食。帰路は梅津から西大路・円町を経て帰校する約二五歳のコースをとることが多かった。毎月一回程度の頻度だったと思う。三年生の夏には奈良への全校夜行軍があった。全員武装（一年生は徒手、二年生は木銃、三年生は村田銃）で午後七時頃平安神宮を発ち、蚊の襲来に悩ませられつつ国道二四号線を歩いて、東の空が白み始める頃に奈良坂を越えて東大寺に到着した。解散後に京都へ帰る奈良電車内で全員くたくたで寝込んでいた光景が記憶に残る。

もう一つは昭和十九年一月十日、平安神宮を出て山中越えを通って近江神宮へ、さらに逢坂山越えで山科・蹴上から平安神宮に帰着する約二三歳の耐寒練成行軍。一人でも落伍すればそのクラスは失格になるという団体競技なので、一人がへばったらまず銃を持ってやり、次には砂袋（三年生は六錠）を入れた背囊も替わってやって、クラスごとの速さを競った。積雪と雪解けのぬかるみ道に悩まされた。

⑤ 軍人組 二年生から陸軍幼年学校や少年飛行兵の募集があり、三年生では海軍予科練習生や陸軍特別幹部候補生の募集があ

あった。純粹に国の大事に参じようと合格者が何人も教室を後にして巢立っていった。四年生の秋には陸軍士官学校や海軍兵学校の入試があり、それに備えて四年の新学期には「軍人組」が作られた。三年生の五つの組に合計五人の級長と十人の副級長がいたが、そのうち計十一人が軍人組を希望して集まったほど「お国のために」という意識は高く、軍人は時代の花形であった。他の四つの組は麦刈りや火薬庫の勤労働員に行っているのに、軍人組だけは当然のように国語・数学・物理の補習授業や、陸士・海兵入試の模擬試験を受けていた。

⑥ 寒稽古 一月中旬の、まだ真つ暗な午前六時に集合して一二五〇人の全校生徒が柔道・剣道・銃剣道のどれかを選び、厳しい寒さのなかで演武をした。一〇日間、日曜も含んで毎日続いた。

⑦ 団体行動 三中には京都市内全域から生徒が通学して来た。円町で市電を降りて、同じ電車に乗り合わせた三中生は全員がさつと隊伍を組み、そのなかの最上級生が指揮者になって団体通学をした。亀岡・八木・園部からの汽車通学生も花園駅から隊伍を組んだ。これは個々バラバラではなくて、どんな時でも団体行動ができるようにするトレーニングであった。

⑧ 成績貼り出し 学年末試験の成績順に同学年生の一番から二五〇番までの全員の名前を長い巻紙に書いて体育館の壁に張

り出された。そして一〇五番の生徒が一〇五組の級長になった。級長は各組生徒の模範であるという一年間の重い責任を負わされた。組(五〇人)は小隊、学年(二五〇人)は中隊、全校(一二五〇人)は大隊であり、分列行進などでは五年一組の級長は大隊長としてサーベルを吊り、壇上から全校生徒に号令をかけた。

⑨ 勤労働員

三年生になると、初夏の麦刈り・秋の稲刈り、祝園火薬庫という恒例のほか、市内各所の工場や忠霊塔建設・防空壕掘りの土木作業などに従事した。こうして五月・六月には勤労働員が忙しくなり、事実上授業はなきに等しい状態になっていた。

麦刈り・稲刈りは、働き手を戦地へ取られた嵯峨野・花園・太秦・梅ヶ畑などの農家の留守宅を手伝うためであり、農家一軒に二・三人ずつの生徒が派遣された。食べ物が多かった頃で、おやつに出された純米のお握りがどんなに嬉しく美味しかったことか。

京都から奈良への中間に祝園火薬庫がある。当時は京都の多くの中等学校生が交代で砲弾運びや火薬炸填の作業をするために動員された。三・四年生で数回は行ったように思う。新聞には一切秘匿されたが、確か昭和十七・十八年に枚方火薬庫と宇治火薬庫がそれぞれ大爆発して、京都でもその爆発音と南東の空の真っ黒い雲に驚かされたことがあるが、爆発したのが祝

園火薬庫でなくて幸運だったと今も思っている。

⑩ 半田への「通年動員」

四年生の七月からは「学徒動員令」により三・四・五年生の七五〇名全員が学業をなげうって愛知県半田市に動員され、昭和十九年十二月七日、東南海大地震で煉瓦の下敷きになって十三名のクラスメートの尊い犠牲者を出した。

その痛恨のできごとについては三宅 仁氏や辻 宏氏の寄稿があるのでここでは触れず、地震以外の私自身の幾つかの生活記憶を次項（4）に綴る。

（参考）京三中の半田での通年動員については

①「紅の血は燃ゆる：読売新聞社、昭和四十六年十二月」をわれわれ三十七期生が刊行した。また三十八期生が②「精一杯生きてきた：昭和五十七年一月」、と③その「続編：平成八年十一月」として詳しく文集（非売品）にまとめているので参照をお奨めする。

なお、本寄稿文の「（3）戦時色・いろいろ」の記述中、日付や数字などの種々のデータについて「紅の血は燃ゆる」の序章にある「昭和十九年一〜七月の飯塚輝次君の日記」などの記載を参照したことを記し、謝意を表する。

(4) 半田の通年勤労働員の思い出

ここでは東南海地震以外の私自身の半田の記憶を思いつくままに書く。

① 山方工場

今は市役所が建っている半田市の中心部に当時は中島飛行機(株) 山方工場があった。その中に天山胴体組立工場や彩雲部品工場などがあった。私が配属された彩雲部品工場は、おそらく明治後期に建ったと思われる紡績工場を、飛行機部品製作用に改修した煉瓦造の建物だった。昔の工場建物の通例となっていた明り取りのガラス窓を付けるために鋸の歯型の屋根であった。地震には最も弱く、耐震補強をしたとしても安心できない煉瓦造なのに、元からあった隔壁など、構造部材の一部が「作業の邪魔だ」として撤去されていた。このことが東南海大地震で倒壊し、山方工場だけで百五十三名という多数の死者を出す大きな原因となった建物である。

そのうち九十三名が動員学徒であり、半田高女二九名、豊橋高女二三名に次いで、私の級友である京三中四年生から十三名という痛恨の犠牲者を出した。

私の遠い記憶と「紅の血は燃ゆる」の付録に記載された地図から類推すれば、その建物は東西六〇米、南北三〇米くらい

だったのではなからうか。

たたみ一畳大ほどの作業台を一〇台くらい並べた列が数列あり、数えたわけではないが、計五〇台くらいあったと思う。その一台に数人か貼り付いて作業していたから、合計二五〇〜三五〇人くらいが働いていたのではなからうか。

作っていたのは「彩雲」の部品である。操縦桿の操作はワイヤーで伝えられて機体後部にある方向舵や水平尾翼を動かす。そのワイヤーによる「引っ張り力」を横の動きに変換するための「ドラム」をリベットなどで組み立てる作業だった。七月・八月の配属当初は群馬県太田市にある中島飛行機本社から来た上州弁丸出しの熟練工の班長が日々指導してくれたが、そのうちすぐに班長がいなくなり、まだ十五歳であった三中生にすべて任される形になった。熟練工の人手が足りなくなったことと、あとになって思えば動員学徒の強い責任感を利用してやる気を引き出す目的もあったように思う。

名古屋工専から動員されて来ていた学徒が飛行機の揚力やピトー管（速度計）の原理などを授業してくれた。兄貴のような存在だったが、今思えば当時の彼はまだ十八歳かせいぜい十九歳だった。その授業は申し訳のように初期のうちだけで、仕事に追われてそんな時間をとれなくなって、すぐに立ち消えになった。われわれの仕事は製品組立てに必要ないろいろのバ

ーツを、伝票を持って倉庫に受け取りに行くことから始まり、ジュラルミン製の基材の所定の位置に電動ドリルで穴を開け、リベットを打って組み立てる作業だった。電動ドリルが動かなくなり、修繕か、または代りの支給を頼んでもなかなか貰えず、ノルマが溜まって困ったことを覚えている。

完成品を収納窓口に持ち込んで検査を受けた。ペナルティはとくになかったが、不良品（オシャカという言葉を半田で覚えた）は班の恥であり、同時にノルマの個数を達成しようとして、私たちは十分純粋であったがために懸命であった。

② 本工場と新機見送り

こうしてできた部品は彩雲胴体組立工場で胴体に取り付けられ、最終工程は本工場にあった全体組み立て（全組み）工場であった。

そこでようやく飛行機の形になった機体に多くの作業員が取り付けて仕上げ作業に励んでいた。そしてすっかり完成に近づいて、濃緑色に日の丸の吹き付け塗装も終えて巣立ちを待つ最前列機の雄姿に感激した。

こうして生れた最新鋭機は、二〇〇米ほど離れた工場内の滑走路まで、牛に曳かれて移動して行った。恥ずかしい話だが当時の私は、飛行機を自動車で曳くことなど思いもよらなかった。移動速度が丁度よい牛に曳かせるものだと思っていた。

新機の目的地は「軍機密」であつたが、海軍の鈴鹿基地であることは誰もが知っていた。

自分たちが苦勞して造った飛行機の戦地での活躍を熱い思いで祈りつつ、夕焼けの美しい西の空に点となり、そして見えなくなるまで見送った思い出が今も暇によみがえる。

③ 残 業 三宅 仁君は昭和十九年十月中に三一九、五時間就業したという表彰状を貰っている。日曜だけが休みとして勤務日数を月に二五日だったと仮定すると一日平均十二、七時間である。朝八時半からであれば土曜も含め夜九時以後までの残業が毎日続いていたことになる。

④ 通 勤 私自身の経験だが、いつものように夕食後二、三時間の残業を終えて山方工場を後にした。寮までの帰路約四料の中程まで来た頃に、警戒警報のサイレンが鳴って民家の灯火が一斉に消え、真っ暗闇の中に取り残されたことがある。懐中電灯は爆撃の何よりの目標になるので絶対に使えない。

同行していた数名で励まし合いながら、かすかな星明かりと勘を頼りに、深夜十二時も過ぎてやっとの思いで寮に辿り着いた記憶がある。

しかしそれでも次の日も朝七時には全校生徒が整列し、四料先の工場を目指して寮の門を後にした。隊伍を組んで………と言いたところだが、油まみれでよれよれの作業服に擦り切

れた草履という見栄えのしない、かなり疲れた集団だったこと
 と思う。やらねばという気力だけで保っていたのではなからう
 か。

⑤ 帰省 二〜三ヶ月に一度くらいは帰省できるなどという
 甘い期待は吹っ飛び、決戦体制とのことで正月も全員半田で迎
 えた。休日は元日だけではなかったかと思う。百歳以上の長距
 離鉄道切符は、しかるべき公的機関の許可証がなければ入手で
 きなかったので、「入試受験」、「病氣療養のための帰省」、「父
 母危篤の電報」くらいしか帰省できる方法はなかった。

⑥ 蓋にいなご どんぶりの飯のほかに一皿のおかずが付い
 た。毎日の献立を日記に詳しく記載していた女学生がいた。豊
 橋松操高女の鶴田さんである。その日記が「ばれいしょの青春」
 と題して刊行されているが、それによれば昭和十九年六月二五
 日からの二ヶ月間に僅か十日を除き、すべてジャガ芋を主とし
 たおかずだったそうである。この本によつて当時の食事が栄養
 的に貧しかったことと、食べ物への執着は私だけではなかった
 ことを知ることができた。

私自身のはつきりした記憶だが、煎つたいなごがたった五
 匹、どんぶりの蓋に載つて出てきたことがあった。飯のほかに
 はそれだけだった。

また、どんぶりが足りず窮余の応急策だったのだろうが、飯

までも蓋に盛って出てきたこともあった。僻みかもしれないが、その飯の量はどう見てもいつもより少なく感じられた。

⑦ 焼き芋 食べ盛りの十五才だったから、いつも空き腹を抱えていた。たまの休日に、寮の裏山にある植大地区の農家にさつま芋の買出しに行った。何軒か回ると売ってくれる農家に何とかありつけた。当時、一ヶ月分の給与にあたる五円でさつま芋一貫目（三、七五^銭）が買えた。もちろん食料統制・経済統制違反のヤミ価格である。

持ち帰った芋を外套に忍ばせて工場の暖房用の炉の灰に入れた。やっと焼きあがる……と思った頃に、減多に来たことがない担任教諭が見回りに来た。焼き芋の匂いが呼び寄せたのかもしれない。当時の教諭と生徒は「私の芋です」と言えるような身近な関係ではなかった。

「誰か知らんが工場で芋を焼くような奴は三中の生徒にはおらんやろな」と言いながら没収されてしまった。その情けなさや恨めしさが今でも忘れられない。

⑧ アゲインと雑炊 毎日の朝・昼・夕食の食券が一人一枚ずつ配られていた。ところがその券で一食を食べた後、どこでどうして入手できるのか、もう一度列の後ろに回って二食目を食べる奴がいた。かなり頻繁に見かけることがあり、「アゲインをする」と言っていたが、京三中には七五〇人分、七五〇枚

が毎食必要なので、調整用として少しは余裕があったのかも
……………などと思っている。

工場の食堂で昼食を食べた後、町に出て雑炊を食べてくる奴もいた。雑炊を食べさせる町の食堂も少なく、一店当たりの鉢数、したがって提供時間も限られていたから、ありつくためには余程うまくやる必要があった。何よりも午後の始業時間までに入門しないとサボっていたことがバレるので、門の守衛の目をどうすり抜けて入るか、咎められたらどう弁解するか……………などいろいろの問題があった。

なかには十一時半頃に、用務があるかのような顔をして要領よく門を出て行った奴もいたようだ。帰ってから昼食券を出して工場内の食堂の昼飯も食べたのだろう。

要するに私は要領が悪いのか、真面目すぎたのか、勇気がなかったのか、アゲインにありついたり、雑炊を食べに出た記憶が残念ながら一度もない。これを書いていると、「一度でよいからあれをやりたい…」と願っていた、当時の「僻み心」が蘇ってくる思いがする。

⑨ 食べ物への恨み

今回この寄稿文を書くために半田時代の生活を思い出そうとしても、大抵のことは忘却のかなたに消えてしまった。しかし食べ物にありつけなかった上記のようないろいろの出来事だ

けは別らしい。ことわざで「食べ物の恨みは怖い」と言うところ、六〇年経った今でもなかなか忘れられないものであることに気が付いた。

⑩ 食糧確保と給食

半田の中島飛行機工場には学徒を含め当時三、四万人の従業員が従事していたそうである。そしてともに最新鋭機であった雷撃機「天山」と偵察機「彩雲」を昭和十九年の秋には日産それぞれ五機と一機程度を作っていたことを戦後の資料によって知った。こんな最重要の軍需工場だったから、肉や魚はともかく、米も野菜も最優先で確保できるはずなのに、それでもこの程度だったのである。何万人分という食料確保と給食も容易でなかったのだろうか、上記のように私が体験した食糧事情は、いかに厳しい時代だったかを顕著に示していると思う。

(5) 生死の分かれ目、何が幸いに？

九州帝大の学生だった兄が「学徒戦時動員要綱」によって昭和十八年十二月にいわゆる「学徒出陣」したあと、私が軍人でなく、三高・京大へ進むことを父は強く希望した。

陸軍士官学校・海軍兵学校は当時の中学生の憧れの的だった。しかしその希望を変えさせたいと、多くの家庭の父母はむ

なしい努力を試みたが、戦死は名誉であつた当時のこと、「軍人になるな」と言えば非国民として糾弾され、わが子にもむしる逆効果になることが多かった。「科学者になってお国のために尽くすのも大切ではないか」というのが当時の父母に許された限度であつた。

私は海兵へ行きたかつたが、親の希望を受け入れて軍人組を希望せず、大学の理工系に目標を置きつつも、級友達が陸士や海兵に合格していくのが羨ましくてならなかつた。そこへ秋になつて降つて湧いたのが「海軍予科生徒制度」新設のニュースである。

年齢から見てもう諦めていたのに、また訪れた最後の機会だからと私が強く希望するので、母が担任教諭に相談に行った。「予科は三年生が中心です。四年生は多分合格しないから、受けさせて落ちたら本人も納得するのではないか。」

そんなこととは露知らず、私は喜び勇んで海軍経理学校（海経）を受けた。

（視力は良いのになぜ海兵でなかつたか。父が出した条件だったのかもしれないが、もはや全く記憶がない。）

東京・品川での海経入試を終えて京都に帰り、明日は半田へ発とうとしていた十二月七日午後一時過ぎ、京都に大きい地震

があった。それが半田に動員中の同級生十三名の尊い命を奪った東南海大地震であった。

海経を受験しなければ、よほどの奇蹟がない限り私は煉瓦の下敷きになって十五歳で死んだところを、海経受験のおかげで助かった。人生は何が幸いになるか分からない。

昭和二十年一月末に三高と海経の合格通知が一日違いで着いた。担任教諭に相談に行ったら、「もちろん軍優先にきまってる!!」と言われ、これでやっと念願がかなったと飛び上がるほど嬉しかったのを覚えている。

四月に憧れの海経予科に入学し、僅か四ヶ月半後の八月十五日に終戦になった。陸士・海兵からの復員者が巷に溢れ、二十年九月の高校・大学の編入学試験の競争率は四〇倍を超えた。とても無理だと諦めていたある日、父が言った。「お前には黙っていたが、三高に休学願いを出してある。一度行ってみたら……。」期待もせずに復学願いを出しておいたらしばらくして「復学許可」を戴いた。それがなければ私の人生は大きく変わっていただろう。

おそれていた兄の戦死公報がついに来たのは昭和二十一年五月だった。父はみるみる白髪になって十歳ほども老けてしまった。昭和二十年一月に三高でなく海経へ行くのを黙認してくれたのは、「海経の入試を受けなかったら、お前は煉瓦の下で死

